洗足学園音楽大学

大学院リサイタルシリーズ①

ピアノジョイントコンサート

～実りの秋を迎えて～

2021年10月2日（土）
11：00　開演（10：40　開場）
洗足学園音楽大学シルバーマウンテン1F

樋口　歌織
F．シューベルト／ピアノ・ソナタ　第１８番　第１楽章
C．ドビュッシー／前奏曲集第２集より　１２．花火

林　　菜月
F．リスト／
巡礼の年　第２年　イタリアより　５．ペトラルカのソネット　第１０４番
バラード第２番

⚠新型コロナウィルス感染症の感染拡大を防ぐためのお願い
・マスク着用の徹底、こまめな手指消毒・手洗い・咳エチケットの励行にご協力ください。
・大声や対面での会話はお控えください。
・演奏者への声援はご遠慮いただき、拍手のみとしてください。
　・休憩時、終演後はスタッフが扉を開けるまでお待ちいただき、空いているドアから混雑を避けて入退場してください。
　・客席内やロビーでのご飲食はお控えください。
・出演者への面会はできません。出演者への花束・プレゼントもご遠慮ください。
　・万一、集団感染の発生が明らかになった際は、保健所に入場者の情報を提供する場合がございます。

主催：洗足学園音楽大学・大学院

■曲目解説■

F.シューベルト(1797-1828) ／ ピアノ・ソナタ 第 18 番 ト長調 D.894 Op.78「幻想」第 1 楽章

ウィーン近郊で生まれウィーンで亡くなった生粋のオーストリアの作曲家。6歳でヴァイオリンとピアノをはじめ、すぐに才能が現れ始める。特に歌曲は素晴らしく、ドイツ歌曲の王と言われている。

シューベルトは生涯で友人をとても大切にしており、特に親しかったのが学校の先輩であったヨーゼフ・フォン・シュパウンである。彼はシューベルトが作曲を始めて間もないころからその才能にいち早く気づき、貧乏であった彼に五線譜を与えたり生涯支援をした。

シューベルトは13のピアノソナタを完成させたが、生前に出版されたのは16.17.18番のみであり、特にこの18番はシューベルト生前に出版できた最後のピアノ・ソナタである。

作曲時シューベルトは29歳。晩年の作品である。澄み切っていて美しく、けれども切なく恐れを一貫して感じるような響きから曲が始まる。死も幸せもどちらも受け止めているかのようである。第 2 主題からは16分音符の細やかな高音の自由なパッセージに変わっていく。提示部では豊かな音で満ちたこのソナタは、前述のJ.シュパウンに献呈された。

C.ドビュッシー (1862-1918) ／《前奏曲集 》第 2 集 12 . 花火

パリ西部のサン＝ジェマルマン＝アン＝レで生まれる。縁があり、シャルル・ド・シヴリーという作曲家の母でありショパンの弟子であったモーテ夫人に、音楽を習うようになる。

1890年代、ドビュッシーはオペラや管弦楽曲に関心があったためピアノの曲は少なく、ピアノ曲は1900年代から多く書かれるようになる。

《ペレアスとメリザンド》、牧神の午後への前奏曲などはこの頃描かれた作品である。

作曲年は、1910-13年。この作品は12曲からなる前奏曲集第 2 集の最後の曲である。第 1 集と第 2 集を合わせると24曲あり、ショパンのプレリュード集が念頭にあった構造といえるであろう。前作の前奏曲集第 1 集に比べて抽象的で実験的な作品で、第 1 集と同じく各曲の終わりに小さく標題が書かれている。

この「花火」は、7月14日のフランス革命記念日の夜の祭典の花火である。

楽譜の出だしには、軽く、均等に、そして遠くから、との指示があるように、静かな夜の中でジリジリと音楽が始まる。すばやい3連符のパッセージを土台に、だんだんと光や音の情景が浮かび上がり、徐々に花火の煌びやかさが増していく。そしてフランス国歌とともに曲が締め括られる、絵画や風景をそのまま音楽にしたような、ユニークな美しい曲である。

F.リスト (1811-1886) ／《巡礼の年 第2年 イタリア》
5 . ペトラルカのソネット 第 104 番

ペトラルカのソネット104番は、リストがイタリア旅行中にイタリアの芸術や文化に感銘を受け、作曲をした「巡礼の年第2年イタリア」の中の一曲である。この曲はイタリア文学で名を残した詩人、ペトラルカの《抒情詩集》から3つのソネットを選び作曲した歌曲を、ピアノ独奏用に自ら編曲したものである。詩の大意は、恐れ、希望をもち、燃えては氷となり、目が見えないのに見ようとし、口がないのに叫ぼうとする、自分を嫌いになりながら他人を愛し、泣きながら笑い、、こうした愛の矛盾を繰り返し、最後に"こんな私にしたのはあなたなのです"と、一言。歌曲、ピアノ曲共にAgitato assai、シンコペーションのリズムで不安や興奮を煽るようなフレーズから始まる。女性との恋に苦しみ悩んでいるが、その苦しささえも愛おしく思ってしまう、というような狂乱の雰囲気を感じ取れる。ピアノ曲として編曲後もリストの技巧的で繊細なパッセージが苦しみや、痛み、愛を表現している。

F.リスト ／ バラード 第 2 番 ロ短調

バラードとは18世紀のドイツの詩の形式で、中世の歴史的な物語や架空の出来事などを扱ったもの、例えばゲーテの「魔王」があげられる。それを歌詞とした劇的かつ通作的な歌曲などがドイツリートとなっている。そして、19世紀に入りショパンが開拓したことによりキャラクターピースとして、器楽曲でもバラードが浸透していった。今回演奏するリストが作曲したバラードの2番が、どのような物語を持つものかはリスト自身によって明らかにされていないが、ある神話や、民族的なものを元にしたのではないかと想定されている。不気味な低音部の半音階進行の上を旋律が流れ、神秘的に曲が始まる。激しく力強い嵐のような面と、優しく甘美な天上の世界を見ているような旋律を中心に劇的に物語が進んでいく。最後はAndantinoで dolce espressivoの表記があり、今までの嵐が幻だったかのように幕を閉じる。 ヴィルトゥオーゾとして活躍したリストだったが、標題音楽という概念を広めたように技巧的な表現は魅せるためだけではなく、物語を音楽で描くために必要であったことを再認識させられる2曲である。

■ プロフィール ■

樋口　歌織

東京都出身。国立音楽大学卒業。4歳よりピアノを学んでおり、現在、洗足学園音楽大学大学院1年器楽専攻ピアノコース在籍。第39回ピティナピアノコンペティション連弾上級部門全国大会入賞。大学4年次には、ピアノ専攻4年生による演奏会に選抜で出演。これまでにピアノを佐々木朋枝、米持隆之、白水芳枝、泉ひろ子、泉ゆりのの各氏に師事。

林　菜月

神奈川県出身。県立弥栄高等学校音楽専攻卒業。洗足学園音楽大学卒業。現在、洗足学園音楽大学大学院2年器楽専攻ピアノコース在籍。学部3年次、ウィーン研修にて現地での選抜演奏会に出演。4年次では室内楽研究、成績優秀者として、管・弦・打・ピアノ室内楽オーディション合格者による室内楽コンサートvol.23に出演。室内楽を清水将仁に師事 。現在、江崎 昌子、谷川 明の各氏に師事。